

新聞の中の混種語の 使用実態からの一考察

— 語種構成の視点から

時岡範子

◆要旨

日本語を語の出自という観点から見ると、「和語・漢語・外来語・混種語」の4種からなるといわれる。他の3種に比べて、あまり聞き慣れない「混種語」の比率は、先行するいくつかの語種別比較調査をみても常に10%に満たない。また、年代を追ってみても増加する傾向をみせない。この混種語というものは、他の語種と競合する性格のものではなく、独自の働きをして存在しているものと思われる。そこで、本研究では新聞を資料にして今日の混種語の実態を語種構成の視点から考察した。その結果、混種語は各語種の意味的・統語的特徴を生かして造語されており、外来語が増えてきていることで「漢語と外来語」の混種語が増加していることがわかった。

◆キーワード

混種語、語種構成、和語、漢語、外来語

◆ABSTRACT

The origin of words in the Japanese language is said to be of four types: Japanese origin, Chinese origin, foreign origin, and hybrid. In previous research, compared to the other three types, the hybrid type occurs in less than 10% of cases. Moreover, it does not appear to be increasing at present. It is also considered to have different characteristics and functions independent of the other types. Therefore, this paper focused on the actual use of words of hybrid origin in Japanese in newspapers.

As a result, it was found that each type of word has its semantic and syntactic features and that these features affect the hybrids form. It was also found that because words of foreign origin are on an increase, Chinese origin/foreign origin words are also increasing.

◆KEY WORDS

hybrid, word type, Japanese origin, Chinese origin, foreign origin

Research on the Actual Use of
Hybrid Japanese in Newspapers
Focusing on word type
NORIKO TOKIOKA

1 はじめに

情報化社会といわれる今日、様々な情報媒体が存在する中で、情報を得る方法としてより一般的であると思われる新聞において「再生可能エネルギー特別措置法案」「スマートフォン向け半導体メモリ」のような字面の長いひとまとまりの語がたくさん使われている。これらのような「和語、漢語、外来語の3種のうち、2種以上の要素の組み合わせによってできている語」(『新版日本語教育事典』)を「混種語」というが、複雑化する時代においていくつかの語種を取り込むことで表現者の意図をより有効に伝達する手段として混種語は利用価値が高まっていると思われる。そこで、その成分である各語種を手掛かりに今日の混種語の実態を探る。

2 先行研究

先行研究については、語種間の統計調査などはみられるが混種語そのものについての研究は多くはない。白井(1989)は、外来語の増加状況から外来語の造語力を知るために、1988年の雑誌6種を対象に混種語を調査している。これは調査対象が雑誌であるため、筆者の資料(新聞)とは異なるが、20余年前の雑誌において外来語が増加してきていることと、和語・漢語>漢語・外来語>その他>和語・外来語の順に多かったという結果をみることができる。

野村(1984)は、『現代用語の基礎知識』を資料に1960年版と1980年版の比較から語種と造語の関係の実態を記し、造語に向けて和語の活用を提案している。その中で、造語力が漢語>外来語>和語の順になるという結果(単純語としての語種)は、筆者の調査結果(混種語の成分としての語種)とほぼ同じものであった。また、野村(1984)は、外来語が、借用段階から日本語の造語に関わろうとしている段階にあるとも指摘している。

3 研究方法

資料は朝日新聞の朝刊2011年8月1日から9月30日の2か月分とした。面種は政治・経済・社会・文化・科学の5分野を選定。それらの各紙面から1日1ページ分について名詞(除外対象:固有名詞、人名、数字を含むもの;「JR東日本」「小沢グループ」「4ミリシーベルト」など)のみを対象に採取した。

4 結果

下の表は2011年8月・9月の混種語調査の結果である。

表1 混種語の延べ語数・異なり語数

混種語	延べ語数	異なり語数
8月分	2,223語	1,547語
9月分	2,189語	1,624語
計	4,412語	3,171語

この表から、延べ語数(4,412語)と異なり語数(3,171語)の重なり部分は71.9%であり、混種語が臨時一語^[註1]的にその都度作られて用いられていることが推測される。

採取した混種語の異なり語数3,171語の語種構成比率の結果は、下の図1のとおりである。多い組み合わせ順に①漢語・外来語(例:自粛ムード、シェア拡大)、

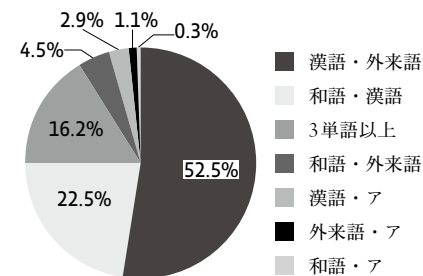


図1 語種構成

②和語・漢語(ねじれ国会、格下げ)、③3単語以上(補助エンジン付きEV)、④和語・外来語(為替レート、ビール大手)、⑤漢語・ア(実質GDP、IT技術)、⑥外来語・ア(ノートPC、Tシャツ)、⑦和語・ア(小型EV、A型)であった(「ア」は「アルファベット大文字語」^[註2]のこと)。

5 考察

5.1 量的側面

今回の調査では「漢語と外来語」の組み合わせが52.5%と最も高かった。各語種に関しては、国立国語研究所による1956年と1994年の雑誌90種と70種に対して語種別に比較した調査がある。これは資料が雑誌であるが、異なり語数は外来語が約10%から30%に大幅に増加してきている。その結果、和語と漢語の使用が減り、40年余りを経て各語種は各々ほぼ30%になっている。このことが語種間の組み合わせを考えた時に「和語・漢語」「漢語・外来語」「和語・外来語」の各ペアによる勢力の均衡に向かうのかということは、各語種自体とそれらを取り巻く情勢などが絡み合う問題があると思われる。

5.1.1 混種語についての遡及的小調査

今回の2011年の調査結果からは「漢語と外来語」が最も多いということがわかった。そこで、さらに過去の傾向を調べるために今回の調査で混種語の使用数が最多の経済面において、2011年、1991年、1961年と遡った小調査を実施した。9月1日から月曜日を除く（市場の都合で月曜日に経済の取り扱いがない年があるため）各6日間、毎日2,000字をベースに混種語を採取した。

表2 新聞紙面（計12,000字内）の経済面の混種語数

	延べ語数	異なり語数	1日平均混種語数 (延べ語数/6日間)
1961年	129語	98語	21.50語
1991年	122語	93語	20.33語
2011年	163語	139語	27.17語

この表では、2011年の混種語が50年前（1961年）に比べて約1.3倍に増加している。しかし、この数値に対しては年代をさらに細かく追う必要がある。

5.1.2 混種語成分としての外来語の量的変化

次の表は、1961年、1991年、2011年における混種語の語種構成数（異なり語数）を示したものである。

表3 混種語の語種構成数（異なり語数）

	1961年	1991年	2011年
和語・漢語	42 (42.9%)	36 (38.7%)	30 (21.5%)
和語・外来語	2 (2.0%)	2 (2.2%)	7 (5.0%)
漢語・外来語	14 (14.3%)	23 (24.7%)	49 (35.2%)
漢語・ア	0 (0%)	0 (0%)	7 (5.0%)
3単種語以上	40 (40.8%)	32 (34.4%)	46 (33.3%)
計	98 (100%)	93 (100%)	139 (100%)

「和・ア」「外来語・ア」は、使用されていないため表では省略した。

この表によると、1961年、1991年は「和語・漢語」が若干数を減らしつつも1番多かったが、2011年は「和語・漢語」がさらに減少し、「漢語・外来語」が最も多くなっている。これは和語が漢語や外来語とは異なる性質があるためと考えられる(5.2.1)。また、「3単種語以上」は常に2番目に多いが若干減少傾向にある。これは、紙面の制約と情報量の増加において混種語の成分としての語種選びにも影響しているものと思われる。1961年の「3単種語以上」の長い混種語は40.8%と高い使用率であり、その一語を構成する語種に注目すると、例えば「本年度下半期経常収支ジリ」という一語の語種構成は、「漢漢和漢漢漢和」である。このように1語を構成している各語種数の総計は、和語45語、漢語93語、外来語6語、ア1語という結果であり、和語と漢語主体の語種構成になっている。一方、外来語成分は、1961年は「娯楽用テレビ」（漢漢外）など6語、1991年は「企業財テク」（漢漢外）など9語、2011年は「写真データ保存サービス」（漢外漢外）など30語に漸次増加している。このように混種語の語種構成からも外来語の増加が「漢語・外来語」の組み合わせを増やしていると考えられる。

5.2 質的側面

5.2.1 混種語成分としての和語

和語は意味を包括しているために、使用者の意図を明確に伝達するには不向きといえる。しかし、株関係などは独自の和語使用（「ドル離れ、為替介入、ユーロ安」など）が現在も続いている。これは、より繊細で厳密な環境において、同音異義の多い漢語を避け、ことばの流れとは逆行してでも和語への信頼や安心感に頼っている一面があると思われる。また、使用者間の共通理解がしやすいという点を利用して比喩的に用いた「赤ちゃん研究員」（新生児を対象に研究した際の対象者の新生児）や、「怠け者菌」（植物と昆虫の間を行き来するファイトプラズマという細菌）、「すり抜け率」（検査をすり抜けてしまう率）、「空っぽウイルス」（殻の中に遺伝子が入っていないウイルス）などが科学面でみられた。これらは科学という専門性（＝難解）に対して、一般の読者を意識した工夫といえる。また、社会や政治、経済面には「青空店舗」、「ぶら下がり取材」、「下ぶくれリスク」などがあった。

合成語の成分としては、「円売りドル買い」などの和語動詞の連用形止めの利用も多くみられた。しかし、「サイン入り」「ミニカップ入り」のように、和語の意味が単純なために見かけの同じ形態（名詞+動詞連用形）が生じる場合もある。前者は「サインに入っている（書かれている）もの」であり、後者は、「ミニカップに（食べ物が）入っている形状のもの」になる。また、「ねじれ国会」は「議員定数が衆参によって異なり、ねじれているような国会」（アスペクト、比喩）、「やらせメール」（使役）などのイメージ重視のような和語の使用もみられる。

また、和語を成分とする混種語の数の減少については、新聞という情報媒体で使用されるという背景から、新しさや簡潔に事物や概念を表現するという要求があるため、それらを満たすという点では、「漢語・外来語」にシフトしてきているのはやむを得ないことと思われる。

5.2.2 混種語成分としての漢語

漢語は、「市バス」「アセス素案」のように、一字または二字の漢語で抽象的・論理的意味を表現することが可能であり、複雑な思考や状況を限られた字数で表現しやすい。また、「除染マニュアル」（除染する際に使う／マニュアル）、「リス

ク分散」（リスクを分散すること）などのように動作用名詞の使用が多くみられるが、語形変化がないことが混種語の成分になる際のメリットになっている。また、難解な漢語を使うと読み手に伝わりにくくなるが、今回の新聞における調査ではその点は考慮されているものと思われた。

5.2.3 混種語成分としての外来語

新聞においては、外来語の意味は一義的であり、特に斬新さを表現することに意義がある。経済面などには、「ハイブリッド車」「タブレット端末」など多数みられた。また、古くから使われてなじみのある外来語は、「窓ガラス」「路線バス」「テレビ中継」などを社会面でみることができる。さらに、文化面では「コンペティション部門」「フェス文化」「モード界」などのような独自の外来語がみられた。これらの外来語は他の語種で表現すること自体その語の由来を不明にして、難解・曖昧なことばの使用になりかねない。多くが名詞で使用されており、漢語と同様に語形変化がなく合成語としての混種語を作りやすい。このように今日の新聞の混種語は、新しい概念の表現をカタカナ書きの外来語に頼っている。複雑さを増す今日の社会的要因や情報化社会により、雑多な概念やモノがかなりのスピードで国外から入り、それらの外国語を翻訳の手間を通さず外来語として利用せざるを得ない現状がある。また外国語への抵抗感も薄れ、日本語にない音の響きを好意的に受け入れる土壌になったことなども外来語が増加し続けている原因と考えられる。

5.3 混種語成分としての各語種の相互関係

下の表は、2011年8・9月の混種語の語種構成における前後関係からみた語数を示したものである。

表4 混種語内の前後関係

① 「漢・外」	1,665	「漢+外」	815	「外+漢」	850
② 「和・漢」	714	「和+漢」	355	「漢+和」	359
③ 「3単種語以上」	515				
④ 「和・外」	144	「和+外」	58	「外+和」	86
⑤ 「漢・ア」	91	「漢+ア」	17	「ア+漢」	74
⑥ 「外・ア」	34	「外+ア」	5	「ア+外」	29
⑦ 「和・ア」	8	「和+ア」	1	「ア+和」	7
計	2,656		1,251		1,405

この表では右端の組み合わせが、左のものよりすべて多くなっている。「和語・漢語」のように前・後項共すでに日本語の中では十分認知されたものになっており、差として表れにくくなっているものもあるが、④から⑦をみる限り後項に外来語やアルファベット大文字語がくることは少ない。このことは、混種語が主語・述語、修飾語・被修飾語の関係で表現される場合、前項よりも後項に意味が集約されていくという日本語の性質を考えると、後項のことばになりやすい条件は日本語としての成熟度の差にあるのではないかと思われる。例えば「データ書き換え」「サイバー攻撃」であれば後項の和語や漢語によって重要な意味は理解できる安心感があるのではないだろうか。しかし、「原発マネー」などは、落ち着きの悪さを感じないだろうか。さらに「ノートPC」「小型EV」になると数が極端に減少する。やはり、外来語やアルファベット大文字語が一般化するためには十分な時間が必要であると思われる。

6 まとめ

以上のように新聞紙上の混種語は、端的な表現で読者に対してインパクトのある紙面を作り出すことが必要であり、意味的に新しさ、おかしみ、わかりやすさなどが求められる。そこで各語種の意味的・統語的特徴を生かして造語され、表現者と受け手の相互関係の中で利用される。語種構成の面からは、従来の「和語・漢語」が減り、外来語の増加によって統語的に接続しやすい語種同士である「漢語・外来語」の混種語が増えている。しかし、外来語に求められている新しさは一過性に過ぎず、いっそう臨時一語の性質を加速させている。そのため語彙化されにくいところが混種語の限界であり、独自の存在といえる。

〈恵泉女学園大学〉

注

[注1] ……「臨時一語」については、林（1982）に「通常の意味での単語のほかに、臨時に、その場限りでの一単語というものが生じている。特に新聞記事の中にはそれらが多くみられる。これらを臨時一語と称し、（以下略）」とあり、「臨時一語」の提唱をしたといわれる。また、石井（2001,2007）にも「文章における臨時一語化」「脱臨時一語化」がある。

[注2] ……「アルファベット大文字語」は、「頭字語（acronym）」や「アルファベット略語」に限らず「A型、LED照明」などのことで、すべてアルファベットの大文字書きであったため使用している。

参考文献

- 石井正彦（2001）「『文章における臨時一語化』の諸形式—新聞の四字漢語の場合」『現代日本語研究』8, pp.1-34. 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座
- 石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 白井清子（1989）「現代の混種語—その語構成と形態素」『大野晋先生古稀記念論文集 日本研究一言語と伝承』角川書店
- 国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊：分析』（国立国語研究所報告25）秀英出版
- 国立国語研究所（2005）『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』（国立国語研究所報告121）国立国語研究所
- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 野村雅昭（1984）「語種と造語力」『日本語学』3(9), pp.40-54. 明治書院
- 林四郎（1982）「臨時一語の構造」『国語学』131, pp.15-26. 秋田屋

